

滋賀県湖東方言



滋賀県方言区画図

【滋賀県の方言区画】滋賀県の方言は「湖北方言」「湖東方言」「湖西方言」「湖南方言」「甲賀方言」の 5 つに大別される。詳細は「滋賀県長浜市方言」(酒井 2014) 参照。

【湖東方言について】アクセント・音声面でも語法面でも、近畿中央部とりわけ京都方言の体系と大きく変わらない。近世から昭和中期まで京都・大阪・東京へ商いや奉公に出る者が多かった地域であり、商家を中心に京都方言の語法（特に敬語形式）を積極的に取り入れていたようである。

本方言の特徴としては、中称接頭辞ソのハ行音化（近畿全般だが、湖東は顕著）、三人称における待遇（＝素材待遇、第三者待遇）表現の多用（県内全般）、理由の接続助詞「デ」と「サカイ（ニ）」の併用（県内各地で見られるが、湖東と甲賀で顕著）、「サイセもらう」のようなサ行イ音便（湖南の一部と共通）などが挙げられる。尊敬形式「(ヤ)ール」（甲賀と

も共通）や助詞「ホン」「ナース」「トサイガ」など、語法面で湖北方言との共通性も見られる。湖北方言域に近い彦根市・犬上郡一帯ではその傾向が強く、かつては音声面でも、湖北特有の連母音に似た、連母音アイをアエのように発音する現象があった。

当地でも全国共通語化・関西共通語化は進んでおり、新興住宅地として開発が進む地区で顕著だが、京阪神や湖南地方の都市部と比べれば、旧来の農村集落では伝統形式の衰退速度は緩やかである。

【表記について】高年層では語中のガ行音で鼻濁音が現れるが、弁別性のない異音であり、区別せず表記する。用例資料から引用したものは原典に従い漢字ひらがな表記としたが、長音を原則「一」にし、読みやすさのため漢字・仮名の使い分けや句読点を一部改めた。アクセントを表記する際は、上昇位置を [、下降位置（＝アクセント核）を] で表した。

【調査概要】本稿の記述は筆者（1988 年彦根市生まれ、1993 年～東近江市旧五個荘町、2007～11 年兵庫県西宮市）の内省を基に、犬上郡豊郷町・甲良町出身の高年層（1933 年、1936 年生まれ）や中年層（1964 年、1966 年生まれ）など周囲の話者の自然観察や用例資料を適宜参考にした。また記述内容を若年層 2 名（彦根市・愛荘町出身者）に確認してもらった。

湖東方言は彦根犬上方言（彦根市北中部と犬上郡各町）と八日市方言（その他）に細分化される（筧 1962）。筆者の現住地は八日市方言域だが、幼少期から彦根市・犬上郡出身者と関わる機会が多かったため、本稿で記述する形式は彦根犬上方言（とりわけ平野部農村地域の変種）のものが中心である。

用例資料として『写真と語り 近江湖東・豊郷の暮らし：昭和 10 年代に生きた人々』（以下「武邑」）を活用した。滋賀県立大学の地域学研究者による聞き取り調査（2000～2004 年）が元になっており、登場する話者は 1911～1929 年生まれの豊郷町出身者および彦根市南西部から豊郷町に嫁いだ女性である。引用元の記載のないものは、筆者の作例もしくは話者観察から得た用例である（後者の場合、話者の年齢層を付した）。共通語訳はいずれも筆者による。

滋賀県湖東方言の活用表

《動詞》

		多段型 書く	一段型 見る	来る	する
終止類	断定非過去	カク	ミル	クル	スル
	断定過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	命令	カケ カキ (一)	△ミヨ ミ (一)	コイ キ (一)	△セヨ セー、セイ シ (一)
	禁止	カクナ カキナ	ミ {ル／ン} ナ ミナ	ク {ル／ン} ナ キナ	ス {ル／ン} ナ スナ シナ
	意志	カコ (一)	ミヨ (一)	コヨ (一)	シヨ (一) ショ (一)
	推量	カクヤロ (一)	ミルヤロ (一)	クルヤロ (一)	スルヤロ (一)
接続類	連体非過去	カク	ミル	クル	スル
	連体過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	中止	カイテ	ミテ	キテ	シテ
	仮定	カイトラ	ミタラ	キタラ	シタラ
派生類	否定	カカン カカヘン	ミン ミーヒン △ミヤヘン	コン コーヘン キーヒン △キヤヘン	セン セーヘン シーヒン △シヤヘン
	丁寧	カキマス	ミマス	キマス	シマス
	使役	カカス カカセル	ミサス ミサセル	コサス コサセル	サス サセル
	受身	カカレル	ミラレル	コラレル	サレル
	可能肯定	カケル	ミラレル ミレル	コラレル コレル △キラレル	《デキル》 《デケル》 △シラレル
	可能否定	カケヘン カケン ヨー カカン	ミラレヘン ミレヘン ミラレン ミレン ヨー ミン	コラレヘン コレヘン コラレン コレン △キラレヘン △キラレン ヨー コン	《デキヒン》 《デケヘン》 《デキン》 《デケン》 △シラレヘン △シラレン ヨー セン
	尊敬	カカハル カカール	ミハル ミヤハル ミヤ (一) ル	キハル キヤハル キャハル キヤ (一) ル キヤール	シハル シヤハル シャハル シヤ (一) ル シャール

	親愛	カキヤル	ミヤル	キヤル	シヤル
	軽卑	カキヨル △カッキヨル	ミヨル	キヨル キョール	シヨル ショール
	継続	カitel カイト (一) ル カिता (一) ル	ミテル ミト (一) ル ミタ (一) ル	キテル キト (一) ル キタ (一) ル	シテル シト (一) ル シタ (一) ル
	希望	カキタイ	ミタイ	キタイ	シタイ
	のだ	カクノヤ カクンヤ カクニヤ カクネン カクネ (ヤ)	ミ {ル／ン} ノヤ ミルンヤ ミ {ル／ン} ニヤ ミ {ル／ン} ネン ミ {ル／ン} ネ (ヤ)	ク {ル／ン} ノヤ クルンヤ ク {ル／ン} ニヤ ク {ル／ン} ネン ク {ル／ン} ネ (ヤ)	ス {ル／ン} ノヤ スルンヤ ス {ル／ン} ニヤ ス {ル／ン} ネン ス {ル／ン} ネ (ヤ)

多段型動詞の基幹音便形

語幹末 子音	語例	活用形例 (過去形)	作り方
k	書く kak·u	カイ-タ	k を i にする。「行く」ik·u は k を Q にする「イッ-タ」だが、高年層では Q がない「イ-タ」の場合もある。
g	嗅ぐ kag·u	カイ-ダ	g を i にする。-タが-ダになる。
s	出す das·u	ダシ-タ ダイ-サ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。高年層では s を i にした上で-タが-サになることがある。
t/c	立つ tac·u	タッ-タ	t/c を Q にする。-タが-ダになる。
n	死ぬ sin·u	シン-ダ	n を N にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob·u	トン-ダ	b を N にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom·u	ノン-ダ	m を N にする。-タが-ダになる。
r	切る kir·u	キッ-タ	r を Q にする。
w/ø	買う ka(w)·u	コー-タ	w を R にする。w の前の母音が a の場合は o に変える。基幹が 2 拍の場合を中心に、R は脱落することがある。共通語化により、高年層以外では日常会話で使用頻度の低い語は w を Q にすることが多い。
	酔う jo(w)·u	ヨー-タ	
	歌う uta(w)·u	ウト (一) タ	

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か（だ）	学生（だ）
終 止 類	断定非過去	アカイ	シズカヤ △シズカナ	ガクセーヤ
	断定過去	アカカッタ	シズカヤッタ	ガクセーヤッタ
	推量	アカイヤロ（一）	シズカヤロ（一）	ガクセーヤロ（一）
接 続 類	連体非過去	アカイ	シズカナ	《ガクセーノ》
	連体過去	アカカッタ	シズカヤッタ	ガクセーヤッタ
	中止非過去	アコーテ アカーテ	シズカデ	ガクセーデ
	中止過去	アカカッテ	シズカヤッテ	ガクセーヤッテ
	仮定	アカカッタラ △アカケリヤ	シズカヤッタラ	ガクセーヤッタラ
派 生 類	否定	アコ（一）ナイ アカ（一）ナイ アカイコトナイ アカイコトアラヘン	シズカヤナイ シズカヤアラヘン シズカデ（ワ）ナイ シズカジャナイ シズカ（ト）{チガウ／チャウ}	ガクセーヤナイ ガクセーヤアラヘン ガクセーデ（ワ）ナイ ガクセージャナイ ガクセー（ト）{チガウ／チャウ}
	なる	アコ（一）ナル アカ（一）ナル	シズカニナル	ガクセーニナル
	副詞	アコー（二） アカイコト △アカイモンニ	シズカニ	（該当形 欠）
	丁寧	アカイデス △アコ（一）オス	シズカデス △シズカドス	ガクセーデス △ガクセードス
	のだ	アカイノヤ アカインヤ アカイニヤ アカイネン アカイネ（ヤ）	シズカナンヤ シズカヤネン シズカヤネ（ヤ）	ガクセーナンヤ ガクセーヤネン ガクセーヤネ（ヤ）

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

規則的な活用型として、基幹多段型（以下「多段型」）と基幹一段型（以下「一段型」）がある。多段型と一段型にどの動詞が所属するかは共通語とほぼ重複するが、共通語とは、「任せる／任す」「咲かせる／咲かす」「済ませる／済ます」などで後者の多段型が優勢である、多段型「見せる」「乗せる」などの過去形・中止形・仮定形でエ段形「ミセタ」「ミセテ」

「ミセタラ」とイ段形「ミシタ」「ミシテ」「ミシタラ」を併用する、一段型「落ちる」の過去形・中止形・仮定形でイ段形「オチタ」「オチテ」「オチタラ」と音便形「オッタ」「オッテ」「オッタラ」を併用するなどの違いがある。「飽く」「借る」「染む」「足る」「垂る」など関西方言を特徴づけてきた多段型動詞は共通語化で一段型が優勢となり、中年層以下では「足る」の否定形「タラン／タラヘン」を「タリン／タリヒン」と併用する程度である。「する」と「来

る」は不規則な活用を持つが、一段型に近い。多段型「違う」は非過去形と丁寧形で「チャウ」「チャイマス」という形式も現われるほか、主に若年層で「チガウカッタ／チャウカッタ（過去）」「チガウクテ／チャウクテ（中止）」「チガウクナイ／チャウクナイ（否定）」といった形容詞に似た活用も見られる。

（2）各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

多段型は「カク」のように基幹ウ段形となる。一段型は「ミル」のように基幹（＝語幹）に「ル」を付け、「来る」「する」は「クル」「スル」のようにウ段形に「ル」を付ける。

- ・雷で倒れた木があつて、皮をめくると、虫がおる（雷で倒れた木があつて、皮をめくると、虫がいる）（武邑 p. 157）
- ・子供の頃に行つて良かつたなーゆー日が必ず来るほん（子供の頃に行つておいて良かつたなという日が必ず来るぞ）（武邑 p. 148）

〈断定過去形〉

多段型は先に挙げた音便形に「タ」（多段型 g・n・b・m の場合は「ダ」）を付け、一段型は基幹、「来る」「する」はイ段形に「タ」を付ける。本方言の特色として、語幹末子音が s の場合「ダシタ→ダイサ」（出した）のような音便形が現れるが、高年層でも稀である。語幹末子音が w の場合いわゆるウ音便になるが、「オモータ→オモタ」（思った）のように長音は脱落することがある（筆者は基幹が2拍の場合ほぼ脱落するが、用例資料では脱落しない形が多い）。中年層以下では共通語化で促音便形もよく現れる。

- ・中江藤樹の劇をしはったクラスもあつたぞ（中江藤樹の劇をされたクラスもあつたぞ）（武邑 p. 108）
- ・わー、すごい金をもろーたわー（わあ、すごい大金を貰ったよ）（武邑 p. 154）

〈命令形〉

使用頻度の高い形式は、多段型と「来る」「する」ではイ段形、一段型では基幹で表す形式（いわゆる連用命令）で、よく長音化する（基幹が1拍の場合は長音形が基本）。一段型で基幹がエ段音のもの（＝下一段活用動詞）が長音化する場合、二重母音[ei]としても実現する。連用命令に付く終助詞には「（一）

ナ／（一）ヤ」と「一ナ／一ヤ／一サ」があり、後者は長音の直前にアクセント核があり（前者は無核）、苛立ちや促す気持ちが強い。「一サ」は女性に多い。

- ・お嫁さんのお菓子やで、もらいなー（お嫁さんのお菓子だよ、もらいなさいね）（武邑 p. 22）
- ・鯿でもかじっていっ（鯿でもかじっていなさい！）（武邑 p. 80）
- ・エンリョセント キバツテ ヨバレイナ（遠慮せずに目一杯食べなさいね ※ヨバレイナは、[ヨバレイナと発音すると穏やかな命令、[ヨバレ]イナと発音するとやや強い命令。ヨバレーナの場合も同様）

多段型のエ段形、「来る」の「コイ」、「する」の「セー／セイ」は主に男性の強い口調で現れ、単体または後ろに「ヤ／ヨ」を付けて使う。一段型でも基幹にアクセント核を置き長音化させることで強い命令を表すが、後ろに「ヤ」を付けると先述の「連用命令＋一ヤ」と違いがなくなる。一段型のヨ形および「する」の「セヨ」は高年層で見られるが、戦前の標準語・書き言葉の影響もあるかもしれない。共通語化に伴い、若年層を中心に一段型と「する」で「ミロ」「シロ」のような語形を使う話者もいる。

- ・ちゃんと指を伸ばせー（きちんと指を伸ばせえ）（武邑 p. 102）
- ・お前らはソ連の捕虜になるんやで、逃げよ。かくも一たるで逃げよ（お前達はソ連の捕虜になるんだから、逃げろ。匿ってやるから逃げろ）（武邑 p. 156）
- ・ホレ ミー（それ見たことか ※発音は[ホレ [ミ]ー。[ホレ ミ]ーだと「それを見る」、[ホレ ミーだと連用命令で「それを見なさい」）

表には含めていないが、中止形によって命令や依頼を表すことも多く行われる。中止形に付く終助詞には「ナ／ヤ」（共通語の中止形＋ネに相当）と「一ナ／一ヤ／一サ」（共通語の中止形＋ヨに相当）があり、後者は長音の直前にアクセント核がある（前者は無核）。「カイテンカ」のように「ンカ」を付ける形式もあるが、使用頻度は低い。

- ・はよー、迎えに来てやー（早く、迎えに来てね）（武邑 p. 52）
- ・センタクモン トイレイトイテテ ユータノニ（洗濯物を取り込んでおいてと言ったのに）

高年層で見られる親しみを込めた命令形式として、多段型では「ア段形+イ」、一段型では「基幹+ヤイ」、「来る」「する」では「イ段形+ヤイ」となるものがあり、後ろに付く終助詞に「ナ／ヤ」がある。

- ・ハヨ イカイナ (早く行きなよ)

このほか、「ハヨ センカイ」(早くしろよ)のように否定形を使う形式などもある。

〈禁止形〉

断定非過去形に「ナ(ヤ／ヨ)」を付け、断定非過去形の末尾がルの場合、ルがよく撥音化する。多段型と「来る」「する」のイ段形および一段型基幹に「ナ(ヤ／イナ)」を付ける形式や、「する」に「スナ」という形式もあるが、使用頻度は低い。

なお、実際の会話では禁止形よりも「ントク」の命令形式(否定形の項目を参照)や「タラアカン」(てはいけない)、「テイラン」(てくれなくていい)などで禁止を促すことが多い。

- ・コッチ クンナヤ (こっちに来るなよ)
- ・モー シナヤ (もうするんじゃないよ)
- ・(噛もうとする飼犬に対して) キテイランノ! ソーユーコト スンニヤッタラ! テイ! カンデイラン! (来てくれなくていいの! そういうことをするんだったら! くら! 噛んでくれなくていい!) (中年層)

〈意志形〉

多段型は「カコ」のようにオ段形で、一段型は「ミヨ」のように基幹に「ヨ」を付けて表す。「する」は「ショ」と「シヨ」を併用する。「来る」は「コヨ」であるが、「イッテコ」(行ってこよう)のように補助動詞として使う場合は「コ」という形式も現れる。いずれも末尾は長音化することがあり、特に「ショ」は比較的長音化しやすい。

- ・仏さんのおぶくさんだけでも残しとこかしらん (お仏壇の仏飯器だけでも残しておこうかな ※オブクサン: 仏壇に供えるご飯またはそのための容器) (武邑 p. 178)
 - ・キョーノ ユーハン ナン シヨイナ (今日の夕食は何にしようかな ※意志形+イナは、かつては生産性を有した可能性もあるが、筆者が確認しているのは、中年層以上で、疑問詞を含む文で「する」に使う例のみ)
- 意志形は勧誘や提案でも使うが、その場合、意志

形単体のほか、意志形に「ナ」を付けるもの(共通語の意志形+ネに相当)と「ーナ／ーヤ／ーサ」を付けるもの(共通語の意志形+ヨに相当)があり、後者は長音の直前にアクセント核がある(前者は無核)。このほか、意志形に「カ／ケ」「マイ(カ／ケ)」「ホン」などを付けるもの(ケは男性のくだけた形式。後ろ二つは主に高年層。意志形+ホンは、厳密には聞き手の注意を引きながら自分の意志を表明する表現)、「ココ イカン?」(ここへ行かない?)のように否定形を使うもの、「サソテミタラ?」(誘ってみれば?)のように仮定形を使うもの(主に女性層で末尾に「ワ」を添えることがある)などがある。

- ・先生、次の時間もよろか (先生、次の時間もやろうか) (武邑 p. 110)
- ・一斗はわしが出したろけ (一斗は私が出してやろうか) (武邑 p. 84)
- ・ホナ イッショニ イコホン (それでは一緒に行くでしょう)

〈推量形〉

断定形(非過去形・過去形とも)に「ヤロ」を付ける。末尾は長音化することがある。高年層を中心に、慣用表現では意志形と同じ語形の古い形式も現れ、比較的生産性のあるものに「カイ(ナ／ヤ)」を付けて反語的に否定する形式があるほか、「ド(一)アロイ」(どうあろうか、いやどうってことない)、「アコカ(イ)」または「アツカイ」(あこうか、いやアカン=駄目だ)、「ドー ナロ」(どうなろうか、いやどうにもならない)などの定型表現がある。

- ・数の差はあったやろけんど、ほとんどの家にありましたわな (数の差はあっただろうけれど、ほとんどの家にありましたね) (武邑 p. 176)
- ・コンナ アツツイナカ ダレガ イコカイナ (こんな暑いなか、誰が行くものかね)

〈連体非過去形〉

断定非過去形と同形である。

- ・かやる心配がないわな (ひっくりかえる心配がないよね) (武邑 p. 68)

〈連体過去形〉

断定過去形と同形である。

- ・ほの手前にあった「茂賀山」ちゅ一小高い山 (その手前にあった「茂賀山」という小高い山)

山) (武邑 p. 122)

〈中止形〉

多段型は先に音便形に「テ」(多段型 $g \cdot n \cdot b \cdot m$ の場合は「デ」)を付け、一段型は基幹、「来る」「する」はイ段形に「テ」を付ける。

- ・土臼は、一人が舵取りをして、上の臼の穴から粳を入れて、ほして、何人かで回すんやで、効率が悪いわなー(土臼は、一人が舵取りをして、上の臼の穴から粳を入れて、そして、何人かで回すんだから、効率が悪いよねえ)
(武邑 p. 74)

中止形に特定の補助動詞が続くと、以下のような縮約がよく起こる。

- ・テアゲル→タゲル
- ・テアル→タ(一)ル(継続形の項目も参照)
- ・テオイデ→トイデ(若年層での使用は少ない)
- ・テオク→トク
- ・テオクレル、テオクレヤス→ト(一)クレル、ト(一)クレヤス(尊敬形の項目も参照)
- ・テオル→ト(一)ル(継続形の項目も参照)
- ・テヤル→タル(親愛形式ではなく授受形式)

縮約形にも多段型 s の特殊な音便は適用されうる。

- ・(個人個人の体に) アワイサールデ(合わせてあるから ※「アワシテアル」の縮約形に特殊な音便が適用された例)(高年層)

「タル」になるものが二つあるがアクセントが異なり、「テアル」の縮約形は「タ」にアクセント核があり(高起式動詞ではアクセント核が1拍前によくずれる)、「テヤル」の縮約形は無核である。例えば、カイ[タ]ルは「書いてある」、カイタ[ル]は「書いてやる」である。ただし、(特に低起式動詞の場合)過去形・中止形・否定形では両者とも「タ」にアクセント核が来るため、アクセント上の違いはなくなる。

中年層以上では「ヨー」と中止形(後ろに「ナ」「ヤホン」などが伴うこともある)を合わせることで行為への感謝を表す形式がある。

- ・オーキニ、キョーワ ヨー キテ(ありがとう、今日はよく来てくれたね)

〈仮定形〉

音便形に「タラ」(多段型 $g \cdot n \cdot b \cdot m$ の場合は「ダラ」)を付ける。「カケバ」のような「バ」を使う形式は書き言葉または共通語的という意識があるが、

稀にくだけて「カキヤー」となる。

事実的用法は、京都・大阪方言では使用の少ない「断定非過去+ト」が本方言の中年層以上では比較的使われ、ソースルトが変化した接続詞「ホースト／ホ(ッ)ト」(すると)や、「ト」に「サイガ」(用例資料では「サイニワ」)を付けて「～となると」「～時には」などを表す形式(形容詞も同様)がある。

共通語の「ナラ」に当たる形式は「ノヤツタラ／ンヤツタラ／ニヤツタラ／ネヤツタラ」が優勢であるが、過去形に「{クライ／グライ}ナラ」を付け「～ようものなら」という意味を表す形式など、慣用表現では「ナラ」も現れる。なお、「クライ」は文末では「当然～とも」という意味で終助詞的に使われる。

- ・畦畔に木があると、竹だけを持っていったら済むにゃ(畦畔に木があると、竹だけを持っていけば済むんだ)(武邑 p. 68)
- ・百姓やない人が戦争に行かはるとさいには、みんなが持ち寄るんですわ(百姓ではない人が戦争に行かれるとなると、みんなが持ち寄るんですよ)(武邑 p. 192)
- ・一発ずつばか撃てんで、「突撃！」ゆーことになったぐらいなら、撃ちもって行かんならん(一発ずつしか撃てないから、「突撃！」ということになろうものなら、撃ちながら行かなければならない)(武邑 p. 130)

〈否定形〉

否定の接辞には「ン」と「ヘン」「ヒン」がある。

「ン」は、多段型ア段形、一段型基幹、「来る」オ段形、「する」エ段形に付く。中年層以下では、共通語形「しない」の影響からか「する」で「シナアカン」(しなければいけない)や「シントイテ」(しないで)、「シンカッタ」(しなかった)などイ段形に付く例もあるが、言い切り形「シン」はほとんど現れない。「シヤナアカン」「シヤントイテ」などの形式も流入しており、使用頻度はまだ低いが、言い切り形「シヤン」も使われるようになってきている(三重県などの形式だが、大阪経由での流入と思われる)。

「ヘン」は基本的に「ン」と同じ接続になるが、一段型で基幹がイ段形のもの(＝上一段活用動詞)は「オキヒン」(起きない)のように「ヘン」が「ヒン」になる。基幹が1拍だと「ミーヒン」(見ない)

や「ネーヘン」(寝ない)のように長音化する。「来る」「する」は「コーヘン」「セーヘン」のように基幹形が「ン」と同じ場合と「キーヒン」「シーヒン」のように一段型と同じ場合があるが、前者が優勢である。「コーヘン」は兵庫県南部に多い新方言と指摘されることが多いが、筧 1962 に既に記述がある。

ほとんどの動詞は「ン」と「ヘン」「ヒン」のどちらも付きうるが、「ある」は「アラヘン」という語形のみ可能で「アラン」にはならない。

高年層では、一段型(特に基幹が1拍のもの)基幹と「来る」「する」イ段形に「ヤヘン」を付ける古い形式を併用する。「(ヤ)ヘン」の古い形式に「セン」(多段型ア段形に付く)と「ヤセン」(一段型基幹と「来る」「する」イ段形に付く)があるが、現在は高年層からも聞く機会は稀である。

- ・好きやでやまらんがな(好きだから止まらないよ)(武邑 p. 162)
- ・ほんなことしたら、値打ちあらへんにやわ(そんなことをしたら、値打ちがないんだよ)(武邑 p. 202)
- ・今の子供は、そんなことせいゆうたってできひんわな(今の子供は、そんなこと「しろ」と言っただってできないよね)(武邑 p. 132)

否定形の活用は下表のとおり。「ン」の方が豊富な形式を持つ。高を付けたものは高年層に、若を付けたものは若年層にほぼ限られる形式である。

	ン系	ヘン系
過去	カカナンダ 高 カカンカッタ	カカヘナンダ 高*1 カカヘンカッタ カカヘンダ*2 カカヘンタ*2
推量	カカンヤロ (一)	カカヘンヤロ (一)
中止 非過去	カカント カカンデ カカイデ 高 カカンクテ 若	カカヘンクテ 若
中止 過去	カカナンデ 高 カカンカッテ	カカヘンカッテ
順接 仮定	カカナンダラ 高 カカンカッタラ カカナ	カカヘナンダラ 高 カカヘンカッタラ カカヘンダラ*2

	カカント	カカヘンタラ*2
逆接 仮定	カカンデモ カカイデモ 高 カカンカテ*3 カカンクテモ 若	カカヘンクテモ 若
～アカン ／イカン *4 (いけない)	カカナ カカント	
～ナラン ／ ナン (ならない)	カカン	
～ない	カカンコト カカンク 若	カカヘンコト カカヘンク 若
～なる	カカンヨーニ カカンク 若	カカヘンヨーニ カカヘンク 若
*1 ヘナンダは尊敬形に続けて使う例が多い。 *2 中年層以下の形式。使用頻度はやや低い。 *3 高年層を含め、使用頻度は低い。 *4 中年層以上ではアカンをアカヘンとも言う。イカンは高年層にほぼ限られる。		

- ・朝まで誰も気づかなんだやないか(朝まで誰も気がつかなかったじゃないか)(武邑 p. 190)
- ・あっこは、隣在所やけんど、区長も来とてくだらへなんだ(あそこは、隣同士の集落だけれど、区長すら来ておいでくださらなかった)(武邑 p. 207)
- ・ゼンゼン キー ツカヘンダ(全然気がつかなかった)(中年層)
- ・わしらは、表の大通りは通らんかったんやわ(私達は、表の大通りは通らなかったんだよ)(武邑 p. 98)
- ・なかなか買えなんでな一、ほら、欲しかったんやわ(なかなか買えなくてねえ、そりゃあ欲しかったんだよ)(武邑 p. 70)
- ・出征兵士も、そら酒でも飲まなんたら、出られんわね一(出征兵士も、そりゃあ酒でも飲まなければ、出られないよねえ)(武邑 p. 190)
- ・短時間にそ一稽古をせんかてできる歌(短時間にそう稽古をしなくてもできる歌)(武邑 p. 111)

- ・はよ一帰らんといかん（早く帰らなければいけない）（武邑 p. 157）
- ・兵隊の学校へいずれは行かんならんにやで、勉強しとかなあかん（兵隊の学校へいずれは行かなければならないのだから、勉強しておかなければいけない）（武邑 p. 134）
- ・イケンコトナイケンド、チョット ムツカシーカモ ワカランデ（行けなくないけれど、ちょっと難しいかもしれないよ）
- ・も一せんどしてしもてなんにも分からへんよ一になるのよ（もうくたびれてしまって何も分からなくなるのよ）（武邑 p. 40）

否定形に補助動詞「おく」を付ける場合「ンデ+オク→ンドク」ではなく「ント+オク→ントク」になる。命令形「ントケ/ントキ/ントイテ/ントカイ（高年層）」や意志形「ントコ（一）」で多用するが、その際「おく」の意味合いが薄れることが多い。

- ・こぼさんといてな、こぼさんといてな（こぼさないでね、こぼさないでね）（武邑 p. 145）
- ・ユーコト キカンコニワ モー ナンモ コータラントコ（言うことを聞かない子にはもう何も買ってやらないでおこう）

若年層を中心に、共通語の「～なくない？」に当たる確認要求表現として否定接辞に「クナイ？」を付ける形式が広まりつつある。伝統形式では「否定接辞+ノ(ト){チガウ/チャウ}？」などとなるが、そもそも伝統方言では推量形で済ませることが多いように感じる。なお、「クナイ？」を「～んじゃない？」の意味で断定形に付ける例もある。

- ・ホンナン イマサラ デキンクナイ？（そんなの今更できくない？）

〈丁寧形〉

多段型イ段形、一段型基幹、「来る」「する」イ段形に「マス」を付ける。「マス」の活用は過去形「マシタ」、中止形「マシテ」、意志形「マシヨ（一）」、否定形「マセン」、仮定形「マシタラ」である。高年層では推量形「マスヤロ（一）」やより改まった否定形「シマセン」（多段型ア段形、一段型基幹に付く。「来る」「する」は未確認）があるほか、稀に「マセン」「マシヨ（一）」が「マヘン」「マヒヨ（一）」になる。また主に高年層で「マスサカイ→マッサカイ」（ますから）や「マスネン→マンネン」（なのです）

のように一部の接辞が続く場合に丁寧形（形容詞・名詞述語の丁寧形も）の末尾スが促音化・撥音化することがあるが、大阪方言ほど顕著ではない。

- ・ほして着きますと、も一タ方ですと、提灯をとぼしますん（そして着きますと、もうタ方ですから、提灯を灯しますの）（武邑 p. 20）
- ・みな小さい子供を背中へぼしますやろ（みんな小さい子供を背中におんぶしますでしょ）（武邑 p. 12）
- ・勝手に放棄したくらいなら、とび口でどつかれても文句言えまへんにや（勝手に放棄しようものなら、とび口で殴られても文句を言えないんです）（武邑 p. 206）
- ・どれが婿さんか分からしません（どれがお婿さんか分かりやしません）（武邑 p. 26）
- ・あんまり出来ませなんだけんど、お嫁に来て教えてもらたんどす（あまり出来やしませんでしたけれど、お嫁に来て教えてもらったんです）（武邑 p. 200）

〈使役形〉

多段型と「する」はア段形に「ス」または「セル」、一段型は基幹に「サス」または「サセル」、「来る」はオ段形に「サス」または「サセル」を付けるが、「ス・サス」が優勢である。「ス・サス」の活用は多段型、「セル・サセル」の活用は一段型に準ずる。

- ・子供には「マクリ」たらゆ一煎じ薬みたいな、漢方薬みたいなもんを飲ましたりしました（子供には「マクリ」とかいいう煎じ薬のような漢方薬のようなものを飲ませたりしました）（武邑 p. 18）
- ・ご飯を炊いて食べさすちゅーよ一な余裕はありませなんだでなーし（ご飯を炊いて食べさせるというような余裕はありませんでしたからねえ）（武邑 p. 138）
- ・なかなかわしらには、班長はさせてもらえなんだでなー（なかなか私達には、班長はさせてもらえなかったからねえ）（武邑 p. 126）

〈受身形〉

多段型と「する」はア段形に「レル」、一段型は基幹に「ラレル」、「来る」はオ段形に「ラレル」を付ける。「レル・ラレル」の活用は一段型に準ずる。

- ・「青年学校」へ行くのが義務付けられましたん

やわ(「青年学校」へ行くのが義務付けられたんですよ)(武邑 p. 128)

- ・目と耳を押さえる練習もさされたでな一(目と耳を押さえる練習もさせられたからねえ)

(武邑 p. 166)

〈可能(肯定・否定)形〉

多段型はエ段形に「ル」、一段型は基幹に「ラレル」、「来る」はオ段形に「ラレル」を付け、「する」は可能形を欠き「デキル／デケル」を使う。高年層では「来る」「する」でイ段形に「ラレル」を付けることがある(寛 1962 によれば、受身形でも)。中年層以下では一段型と「来る」で「ラレル」ではなく「レル」を付けることが増えている。「ル・(ラ)レル」の活用は一段型に準ずるが、命令形を欠く。

不可能を表す場合は可能形の末尾ルを否定接辞に変える。心理的・能力的な障壁によって不可能であることを強調する場合は動詞の前に「ヨー」を置くが、その際は通常の否定形を使うことが多い。

- ・最初からしまいまで言えると座らせてもらえるにゃけど、言えんもんは、じーっと立ったままで、言えるまでまた練習して(最初から最後まで言えると座らせてもらえるんだけど、言えない者は、じーっと立ったままで、言えるまでまた練習して)(武邑 p. 46)
- ・おひやがこんだけ残ったるで、ごんご一炊いたら、お夕飯はみんなでよばれられる(冷や飯がこれだけ残っているから、五合炊けば、お夕飯はみんなで食べられる)(武邑 p. 32)
- ・自慢でけんでよ(自慢できないよ)(武邑 p. 204)
- ・(物価高騰で) よ一買わなんだがな、パン一個を(とてもじゃないが買えなかったよ、パン一個を)(武邑 p. 155)

〈尊敬形〉

「ハル」と「ヤハル」を主に使い、高年層では「ナハル」や「ヤス」も見られる。改まった場面ではラレルやオッシャル、イラッシャルなど共通語の形式を借用するが、高年層では「キラレル」(来られる)や「シラレル」(される)という語形もある。

「ハル」は多段型ア段形、一段型基幹、「来る」「する」イ段形に付く。「ヤハル」は中年層以上が「ハル」と併用する古い形式で、一段型(主に基幹が1拍のもの)基幹と「来る」「する」イ段形に付くが、「来

る」「する」「居る」では「キヤハル→キャハル」「シヤハル→シャハル」「イヤハル→ヤハル」になることがある。「(ヤ)ハル」の活用は多段型に準ずるが、命令形を欠く。寛 1962 では否定形は「カカハラ／カカハラヘン」のように「ン」「ヘン」両方付くところがあるが、筆者は「ヘン」のみ。共通語では使役形・受身形と尊敬形の併用は稀だが、本方言では「ノマサハル」(飲ませなさる)や「オコラレハッタ」(怒られなさった)のような言い方が普通に行われる。

打ち解けた場面を中心に「カカル」のように「ハル」からh音が脱落した形式もよく現れるが、一段型(基幹の拍数問わず)と「来る」「する」は「ヤハル」からh音が脱落する(「ヤハル」を常用しない若い話者も)。「来る」「する」「居る」ではよく「キヤール→キャール」「シヤール→シャール」「イヤール→ヤール」になる。活用は「(ヤ)ハル」に準ずるが、否定形で「カカーラン／カカーラヘン」のような規則通りの形に加え、話者によっては「カカーレン」のようなエ段形を使う変則的な形も現れる(湖北に多いか)。「(ヤ)ール」は湖北方言と共通する形式であるが、本方言の特色に短音化があり、筆者の場合、過去形・中止形・仮定形は「カ Катタ」「カ Катテ」「カ Катタラ」のように短音形が優勢で、一段型と「来る」「する」では非過去形と否定形も「ミヤル」「ミヤラン／ミヤラヘン」のようによく短音化する。

「(ヤ)ハル」「(ヤ)ール」は動作主が二人称か三人称かで用法が異なる。動作主が二人称の場合はある程度敬意を抱く対象に使うが、三人称の場合は友人や家族、目下、漠然とした人物・集団など敬意が薄いあるいは全くない対象にも高い頻度で使う。筆者の感覚では、三人称の動作には尊敬・親愛・軽卑いずれかの接辞を付けることがほぼ義務的で、特に動作主が目上の場合、「(ヤ)ハル」「(ヤ)ール」を付けることが敬意の表れになるというより、付けないことがぞんざいさの表れになる。

「(ヤ)ール」は寛 1962 に「わかい世代におおくつかわれる」とあり、筆者が観察した高年層では使用が見られた一方、用例資料には全く現れない。もっとも、用例資料では「(ヤ)ール」を「(ヤ)ハル」と聞き取って書き起こされた可能性も考えられる。

- ・ごえんさんはみんなよりも、よ一勉強をしと
かはりますでな一(ご住職はみんなよりも、

よく勉強をしておかれますからねえ ※ゴエンサンは浄土真宗門徒が使う語。当地は浄土真宗寺院が多い(武邑 p. 136)

- ・うちの先祖は、なんちゅー非国民やったんやろゆーて、子孫が嘆かはるで、(金物を供出に)出さなあかん(「うちの先祖は、なんという非国民だったんだろう」と子孫が嘆かれるから、出さなければいけない)(武邑 p. 178)
- ・センサー ドコ イカッタカ シッテル?(先生がどこへ行かれたか知っている?)
- ・ナンモ ユーテキヤーラヘンニヤ(何も言ってこられないんだ)(中年層)
- ・(テレビ番組表を見ている人に)イマ ナンカオモロイバングミ ヤッテヤール? (今何か面白い番組をやっている? ※特定の人物でなく、制作スタッフや出演者といった存在を漠然と意識してヤールを使っている)

高年層で見られる「ナハル」は、多段型と「来る」「する」のイ段形、一段型基幹に付き、活用は多段型に準じ、命令形「ナハレ/ナ(ハ)イ」を持つ。「ヤス」は動詞の前に「オ」を付け(筧 1962 には「あまりオをつけない」とあるが、筆者は付ける形しか馴染みがない)、多段型と「する」のイ段形、一段型基幹に付くが(「来る」は「オイデヤス」という形式を使う)、高年層でも日常的な尊敬形として活用させて使うことは稀で、「オ……ヤス」を無活用で依頼形式として使うほか、「オカエリヤス」(おかえりなさい)や「オヤスミヤス」(おやすみなさい)、「ゴメンヤス」(ごめんください)などの定型表現に限られる。

- ・ほこねのお子たちが帰りなはると、走って行って「お坊ちゃん、お帰りなさいませ」ちゅーて言わんならんし(そこの家のお子様方がお帰りになると、走って行って「お坊ちゃん、お帰りなさいませ」と言わなければならないし)(武邑 p. 17)
- ・今日は衣装見せをしますさかいに、来と一くれやす(今日は衣装の披露をしますから、来てください)(武邑 p. 30)

「くれる」の尊敬形式には「クレ(ヤ)ハル」や「クレヤ(一)ル」のほか、主に高年層で「オクレル」「クダハル」という形式がある(「オクレル」は専ら補助動詞として現れる)。「オクレル」の活用は

一段型に準ずるが、後ろに「ナハル」が続く時は「オク(ン)ナハル」になる。「クダハル」の活用は多段型に準ずるが、命令形は「クダ(ハ)イ」で、過去形・中止形・仮定形で「クダッタ」「クダッテ」「クダッタラ」のようにハが脱落することがある。

- ・ごえんさんも、時代に合わせたお説教をしと一くれる(ご住職も、時代に合わせたお説教をしてくださる)(武邑 p. 50)
- ・よその子の世話をしてくだはってんわ(よその子の世話をしてくださったんだよ)(武邑 p. 136)

筧 1962 ではこのほかに、軽い尊敬を表す接辞「ル・ラル」や、「来る」の尊敬形式「ワス」、「来る」「居る」の尊敬形式「ゴザル」なども本方言の尊敬形式として記述しているが、今回の記述の参考にした筆者内省・話者観察・用例資料では現れなかった。〈親愛形〉

動作主への慈しみや親しみ(以下、親愛と称する)を表す接辞に「ヤル」があり、多段型と「来る」「する」のイ段形、一段型基幹に付く。活用は多段型に準ずるが、丁寧形は未確認で(筆者は不可。敬体では「カキヤルンデス」などとする)、命令形を欠く(歴史的には命令形「ヤレ」があったようで、命令形の項目で記述した「連用命令+ヤ」や「イ・ヤイ」はその名残とされる)。否定形は通常「カキヤラヘン」のように「ヘン」を付けるが、「カキヤラン」のように「ン」も不可ではない。過去には多段型で「カキヤル」のように「イ段形+ヤル」という形式があったが、筆者は馴染みがない。筧 1962 に「わかい世代ではヤル・ヤルの対立がくずれてヤルのみとなり」とある。

多段型以外の動詞および継続「テル」に付ける際、短音化した尊敬「ヤール」と語形が重複するが、アクセントが異なる。親愛「ヤル」は「ヤ」の1拍前にアクセント核がある(否定形では「ヤ」にアクセント核が来ることも多い)一方、尊敬「ヤ(一)ル」は無核(過去形・中止形・仮定形・否定形では「ヤ」にアクセント核がある)である。例えば「見る」「見ている」の場合、[ミ]ヤル・[ミテ]ヤルだと親愛形、[ミヤル]・[ミテヤル]だと尊敬形である。

尊敬「(ヤ)ール」は親愛的にも使う形式であり、「ヤル」と「(ヤ)ール」の語形やアクセントの区別

がはっきりしない場合も多いが、基本的に「ヤル」は目上には使わず、動作主は三人称に限られる。

なお、用例資料に「ヤル」は現れず、筧 1962 にヤルの分布について「彦根市・犬上郡をのぞく」とあるが、筆者および筆者が観察した話者は使用する。

・<弟の名前>ガ アカシニ イヤルケンド (〇〇が明石にいるけれど) (高年層)

・(飼い犬を掴もうとする筆者を見て) ツカマシ
ヤラヘンホン (掴ませないよ) (中年層)

〈軽卑形〉

動作主への苛立ちや下に見る気持ち (以下、軽卑と称す) を表す接辞に「ヨル」があり、多段型と「来る」「する」のイ段形、一段型基幹に付く。多段型の一部で「カキヨル→カッキヨル」のように変化するほか (主に高年層)、「来る」「する」「居る」では「キヨル→キョール」「シヨル→ショール」「イヨル→ヨール」になることがある (尊敬「キャール」「シャール」「ヤール」との類推もあるか)。活用は多段型に準ずるが、丁寧形は未確認で (筆者は不可。敬体では「カキヨルンデス」などとする)、命令形を欠く。「キョール」「ショール」は過去形・中止形・仮定形で「キョッタ」「キョッテ」「キョッタラ」のようによく短音化する。親愛形と同様、「ヨル」の動作主は三人称に限られる。男性層を中心に、親愛を込めて使うことや、無生物に対して軽卑を伴わず使うことも多い。

・(シベリア抑留の宿舎で) 冬なんかはピーチカの火を焚く不寝番がおるんやけど、夜は眠たいさかいに、火焚きが寝てしまいよる (冬なんかはピーチカの火を焚く不寝番がいるんだけど、夜は眠たいから、不寝番が寝てしまいやがる) (武邑 p. 157)

・あーゆー劇の苦労を思うと、今のテレビ見ても、上手にしよるわなー、子役でも。あれには感心するわ (ああいう劇の苦労を思うと、今のテレビを見ている、上手にするよねえ、子役でも。あれには感心するよ) (武邑 p. 111)

・風が吹いてくれよらんかいな (風が吹いてくれないかな) (武邑 p. 88)

卑罵形式には「ヤガル」「クサル」「サラス」(動詞への付き方は「ヨル」と同じで、「ヤガル」「クサル」は継続「テル」にも付く。活用は多段型に準じ、

命令形を持つ。「サラス」は単体で「する」の卑罵語) や「ケツカル」(中止形にのみ付く。活用は多段型に準ずると思われるが、筆者は非過去形しか馴染みがない) などがあり、「ヨル」と違って二人称にも使う。個人差もあるが卑罵形式は元々日常会話での使用頻度が低く、共通語形と同じ「ヤガル」を除いて卑罵形式の多くは若年層ではほとんど使わない。

・オマエワ ナニオ サラシテケツカルンヤ
(お前は何をやっていやがるんだ)

〈継続形〉

「ている」「ておる」「てある」に由来する「テル」「トル」「タル」を使う (多段型 g・n・b・m の場合は「デル」「ドル」「ダル」)。「タル」はしばしば「タール」と長音形になり (用例資料では短音形のみ現れるが、筆者は非過去形では長音形が優勢)、「トル」も主に動作主が三人称の場合に時折「トール」になる。いずれも多段型音便形、一段型基幹、「来る」「する」イ段形に付く。

「トル」「タル」の活用は多段型、「テル」の活用は一段型に準ずるが、「タル」は命令形を欠く。否定形は「テル」「タル」には通常「ヘン」が付き、「トル」には「ン」「ヘン」どちらも付く (「ン」がやや優勢か) が、非過去形や推量形以外の活用では「カイトント (中止)」「カイトナ (順接仮定)」のように「テル」と「ン」の組み合わせが優勢。共通語形の借用と思われるが、「テル」の否定形には「テナイ」も高年層を含めて現れやすい。「ヨー イワントルナ」(よく、言い返さずに黙っているな。主に高年層) や「シランテル」(知らないでいる) など特定の表現で「ン」に「テル」「トル」が直接付くこともある。「テル」には「カITE (ヤ) ハル」「カITEナハル」「カITEヤ (ー) ル」「カITEヤル」「カITEヨル」のように待遇接辞が付く (「テヨル」は使用場面が「トル」と重複するため稀)。「カカハッテル」のように「テル」を待遇接辞の後ろに置くことはしない。

動作主が有生物の場合は「テル」、有生物かつ軽卑を伴う場合は「トル」(聞き手への苛立ちや無遠慮さ、気安さなどもしばしば伴う。多用すると男性的でぞんざいな文体になる)、無生物の場合は「タル」という使い分けが基本だが、動作主が無生物でも動きがある場合は「テル」、軽卑を伴う場合は「トル」になりうる (例えば「雨が降っている」は「フッタ

ル」「フッテル」「フットル」いずれも可)。共通語の「てある」と違い、本方言の「タル」は自動詞や知覚動詞にも使うが、中年層以下では共通語の「てある」と用法が異なる場合の「タル」は「テル」「トル」に集約されつつある。

- ・今はお米が余ってしもて、「米はいらん」とかゆーてるけど（今はお米が余ってしまつて、「米は要らない」とか言っているけれど）（武邑 p. 136）
- ・狼がうおーちちゆーて鳴いとるし（狼がうおーちちと鳴いているし）（武邑 p. 154）
- ・供出の釣鐘やらが、ぎょーさん積んだままになつたつたがな。たんまで弾丸にはなつたらへんにやわなー（供出の釣鐘やらが、たくさん積んだままになっていたよ。全然弾丸にはなっていないんだよねえ）（武邑 p. 180）
- ・アンタ ホンマニ ワカッタンノ？（あなた本当に理解しているの？）
- ・キョーワ イブキサンガ ヨー ミエタル（今日は伊吹山がよく見えている）

〈希望形〉

多段型と「来る」「する」はイ段形、一段型は基幹に「タイ」を付ける。「タイ」の活用は形容詞型で、否定形は「ト（一）ナイ」や「タ（一）ナイ」となるが、「やらずに済むならやりたくない」程度の弱い拒絶を表す場合「トミナイ」という形式もある（生産性がやや低く、若年層での使用は少ない）。

- ・子供は、桜よりか干店（ほしみせ）が見たいにや（子供は、桜よりも出店が見たいんだ）（武邑 p. 122）
- ・トシ トルト カナン。イゴキトミナイ（年を取ると嫌だ。動く気にならない）（高年層）

〈のだ形〉

断定非過去形に「ノヤ」を付けるが、通常「ンヤ」や「ニャ」に変化させて言う。「ネン」や「ネ（ヤ）」も見られるが、「ネ（ヤ）」の使用頻度はあまり高くない。断定非過去形の末尾がルの動詞に付ける場合、ルがよく撥音化する。過去形は「タンヤ」または「テン」になる。高年層では、のだ形が丁寧形にも付く。

数ある形式の中でも「ニャ」の多用は本方言を特徴づけるもので、のだ形に引かれてか「ンヤンカー（んだよね。主に中年層）→ニヤンカー」「ノヤワカ

ラン（のやら分らない）→ニヤワカラン」といった語形変化も起こるが、若年層では衰微しつつある。

- ・先生が缶に入ったワックスを棒で、ちょんちょんと床に置いていかはんねん。ほれを子供らが喜んで、わーっと広げてなー。一面に広げた後、かーっと磨くにや。ほの時には、滋賀県民の歌がかかんにや（先生が缶に入ったワックスを棒でちょんちょんと床に置いていかれるんだ。それを子供達が喜んで、わーっと広げてねえ。一面に広げた後、かーっと磨くんだ。その時には、滋賀県民の歌がかか
- るんだ）（武邑 p. 106）
- ・うまいこと相手に当てんとあかんねや、ちゃんと審判がいはるんやでな（うまく相手に当てないといけないんだ、ちゃんと審判がおられるんだからね）（武邑 p. 130）
- ・善哉は「しっちょ鍋」ゆー大き鍋で、家のおくどさんで炊きますにや（善哉は七升鍋という大きい鍋で、家のかまどで炊くんですよ）（武邑 p. 145）
- ・一緒に連れていんだけど、豊郷の駅からは、も一歩けませんねわ（一緒に連れて帰ったけれど、豊郷駅からは、もう歩けないんですよ）（武邑 p. 220）
- ・ほん昔は「千枚歯」ちゅーので、しごいたんや（ほんの昔は「千枚歯」というもので、しごいたんだ）（武邑 p. 70）
- ・学校の先生に教えてもらてん（学校の先生に教えてもらったんだ）（武邑 p. 86）

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

形容詞の中止形・否定形・なる形・副詞形・丁寧形では下表のような音便形が現れる。語幹末が i のものは、改まった場面などで「よろしゅーお願いします」（武邑 p. 34）や「お恥ずかしゅーございますけん」（武邑 p. 30）のように拗音形も現れる。中年層以下では語幹末が a のもので o に交替させない形も現れる。若年層では共通語化で「ヨー（良く）や」「ハヨ（一）」「早く」など特定の形を除いて音便形の使用自体が減っている。なお、「無い」は高年層でも非音便形の使用が比較的多く、「ほれと

なしに」(それとなく)(武邑 p. 120)のように名詞化させて音便形を回避することも行われる。

寛 1962 では、特殊な活用を持つ語として「ウイ」(申し訳ない、気の毒だ、つらい等)が挙げられ、「ウーカッタ(過去)」「ウーケリヤ(仮定)」「ウーソーヤ(状態)」のように語幹が長音形になるとあるが、現在は「ウイ」の使用自体が高年層にほぼ限られ、筆者は非過去形以外の活用形を確認できていない。寛 1962 では触れられていないが「スイ」(酸っぱい)も「ウイ」と同様の活用を持ち、筆者も長音形の語幹を過去形「スーカッタ」などで使う。

語 幹 末 母 音	交替後	例(～なる)
a	o, a	アカイ:アコ(一)ナル、アカ(一)ナル
i	i	オーキー:オーキ(一)ナル
u	u	ワルイ:ワル(一)ナル
o	o	ヨイ/エー:ヨーナル

〈断定非過去形〉

語幹に「イ」を付ける。「良い」は「ヨイ」「エー」の2形式あるが(本方言ではくだけた場面でも「ヨイ」が現れる)、中年層以下では「イー」も多い。

- ・(妊娠で)大きーお腹をしてるんやで、毎日えらいのよ(大きいお腹をしているんだから、毎日しんどいのよ)(武邑 p. 40)
- ・ほら、主役になる子はえーわいな(そりゃあ、主役になる子はいいさ)(武邑 p. 111)

〈断定過去形〉

語幹に「カッタ」を付ける。

- ・字(あざ)に一台ばかなかったと思うなー(字に一台しかなかったと思うねえ)(武邑 p. 74)

〈推量形〉

断定形に「ヤロ」を付ける。末尾は長音化することがある。

- ・何せ、食うもんがないやろ(何せ、食うものがないだろう)(武邑 p. 157)

〈連体非過去形〉

断定非過去形と同形である。

- ・こんないっかい肖像が、ちゃんと飾ったったんやわ(こんな大きい肖像が、きちんと飾ってあったんだよ)(武邑 p. 222)

〈連体過去形〉

断定過去形と同形である。

- ・テンスー ヨカッタモンニワ エーモン ヤロ(点数が良かった者には良いものをやろう)

〈中止非過去形〉

音便形に「テ」を付ける。語幹が1拍のものを除いて音便形が稀に短音化する。

- ・もー忙しーて忙しーて(もう忙しくて忙しくて)(武邑 p. 50)
- ・ほそーて、なごーて粘り気のあるよーな藁やったで、藁細工には、ほん良かったんですわ(細くて、長くて粘り気のあるような藁だったから、藁細工には、本当に良かったんですよ)(武邑 p. 82)

〈中止過去形〉

語幹に「カッテ」を付ける。なお、中止非過去と中止過去は完全には分かれておらず、過去の文脈であっても「音便形+テ」で表すことがある。

- ・一回も負けたことがなかってなー、連戦連勝でしたんや(一回も負けたことがなくてねえ、連戦連勝だったんですよ)(武邑 p. 114)

〈仮定形〉

語幹に「カッタラ」を付けるが、稀に語幹に「ケリヤ」を付けることもある。主に高年層で、「無い」の仮定形として「ナケリヤ」と動詞否定形の仮定形「ナ」の混交と見られる「ナケナ」もある。

- ・エラカッタラ ムリ セントキ(しんどかったら無理しないで)
- ・親類は何か用がなけりや、集まらんわなー(親類は何か用がなければ、集まらないよねえ)(武邑 p. 93)
- ・ホーデナケナ アカンワナ(そうでなければいけないよね)

〈否定形〉

音便形に「ナイ」を付ける。語幹が1拍のものを除いて音便形は短音化することがあるが、京都・大阪方言ほど顕著ではない。連体非過去形に「コトナイ」または「コトアラヘン」を付ける形式もある。

- ・ほんなもん、今やったら、おいしーないで(そんなもの、今だったら、おいしくないよ)(武邑 p. 145)

〈なる形〉

音便形に「ナル」を付ける。否定形と同様、語幹が1拍のものを除いて音便形は短音化することがあるが、京都・大阪方言ほど顕著ではない。

- ・ 大き一なったら、満州へ行け（大きくなったら、満州へ行け）（武邑 p. 148）

〈副詞形〉

音便形そのまま、あるいは音便形に「ニ」を付ける。連体非過去形に「コト」や「モンニ」（後者は主に高年層）を付ける形式もある。

- ・ 戦争時分は、お米はものすご一大切に（戦時中は、お米はものすごく大切に）（武邑 p. 136）
- ・ 日が暮れる前からはよ一に夕飯を食べてな（日が暮れる前から早くに夕飯を食べてね）（武邑 p. 124）
- ・ 慣れるとうまい一ことできるんやわ（慣れるとうまくできるんだよ）（武邑 p. 70）
- ・ ひどい一もんに怒られんならんねわ（ひどく怒られなければならないんだよ）（武邑 p. 128）

〈丁寧形〉

断定非過去形に「デス」を付ける。音便形に「オス」を付ける形式もあるが高年層でも稀である。過去形にする場合、「デス」は形容詞を過去形にし、「オス」の場合は「オス」を過去形「オンタ」にする。「オス」単体では「ある」の丁寧形であり、その否定形「オヘン」は「無い」の丁寧形として使われる。

- ・ サッカリンはちょっと甘い一ですやろ（サッカリンはちょっと甘いでしょう）（武邑 p. 140）
- ・ ほんでも、当時はど一もおへ一なんだわ（それでも、当時は問題なかったですよ）（武邑 p. 14）

〈のだ形〉

動詞と同様、断定非過去形に「ノヤ／ンヤ／ニヤ／ネン／ネ（ヤ）」を付ける。過去形は語幹に「カッタンヤ」または「カッテン」を付ける。

- ・ ほら、劇は面白一いにやど（そりゃあ、劇は面白いんだぞ）（武邑 p. 111）

【形容名詞述語・名詞述語】

〈断定非過去形〉

「ヤ」を付けるが、主に高年層で形容名詞に「ナ」を付けて詠嘆を表すことがある。

- ・ ほら、仏さんみたいな人や（そりゃあ、仏様みたいな人だ）（武邑 p. 198）

- ・ 雨が降ると、雪駄が売れませんが、（雪駄屋に嫁にやった）娘がかわい一そ一な一な一と思わはる。ほして、天気になると、傘が売れんで、今度は傘屋へやった娘がかわい一そ一やとゆ一話でしたんや（「雨が降ると、雪駄が売れませんか、娘が可哀想だなあと思われる。そして、天気になると、傘が売れないから、今度は傘屋へやった娘が可哀想だ」という話だったんです）（武邑 p. 50）

〈断定過去形〉

「ヤッタ」を付ける。

- ・ 豊郷小学校は、体育に熱心一やったでな一（豊郷小学校は、体育に熱心だったからねえ）（武邑 p. 112）

〈推量形〉

「ヤロ」を付ける。末尾は長音化することがある。

- ・ 学校のやろ一か、村のやろ一かな一。おそらく、公共のもんやと思いますわ（学校のだろうか、村のだろうかねえ。おそらく公共のものだと思いますよ）（武邑 p. 226）

〈連体非過去形〉

形容名詞では「ナ」を付け、名詞の連体格では助詞「ノ」を使う。

- ・ 甘いもの好き一な人には、小豆を炊いてな一（甘いものが好きな人には、小豆を炊いてねえ）（武邑 p. 91）
- ・ 男の子の遊び一ゆ一と、相撲がありましたな（男の子の遊びといえば、相撲がありましたね）（武邑 p. 118）

〈連体過去形〉

断定過去形と同形である。

- ・ マダ ゲンキ一ヤッタトキ（まだ元気だった時）

〈中止非過去形〉

「デ」を付ける。

- ・ （二枚の雑巾のうち）一枚はワックス一掛け用で、ほの雑巾はじきにべたべたになんにゃ（一枚はワックス掛け用で、その雑巾はすぐにべたべたになるんだ）（武邑 p. 106）

〈中止過去形〉

「ヤッテ」を付ける。形容詞と同様、中止非過去と中止過去は完全には分かれておらず、過去の文脈であっても「デ」で表すことがある。

- ・その当時はまだ、日本軍も健在やってなー（その当時はまだ、日本軍も健在でねえ）（武邑 p. 170）

〈仮定形〉

「ヤッタラ」を付ける。ソレナラが変化した接続詞「ホンナラ／ホナ」（それでは）や、主に高年層が使う「であればこそ」という意味の「ナラコソ」など、慣用表現では「ナラ」も現れる。

- ・今やったら、鯛の尾頭つきでご馳走するけんど（今だったら、鯛の尾頭つきでご馳走するけれど）（武邑 p. 192）
- ・オヤナラコソヤ（親であればこそだ）（高年層）

〈否定形〉

主に「ヤナイ」を付けるが、「ヤアラヘン」「デ(ワ)ナイ」「ジャナイ」などの形式もある。「ヤナイ／デ(ワ)ナイ／ジャナイ」の活用は形容詞「無い」に準ずる。格助詞「ト」（くだけた場面などでよく脱落する）と「違う」を合わせた形式もよく使われる。

- ・食事だけやの一て、障子貼りやとか掃除やとか、家のこともありますやろ（食事だけではなくて、障子貼りだとか掃除だとか、家のこともありますでしょ）（武邑 p. 92）
- ・そーでない親の子も多かってなーし（そうではない親の子も多くてねえ）（武邑 p. 144）
- ・おじいさん、おばあさんは、働けるよーな年ではないけんど（おじいさん、おばあさんは、働けるような年ではないけれど）（武邑 p. 76）
- ・火鉢があるじゃなし、炭で火を起こして当たるじゃなし（火鉢があるでなく、炭で火を起こして当たるでなく）（武邑 p. 142）
- ・ほこに付いたるのは金（かね）のボタンとちやいますねん（そこに付いてあるのは金のボタンではないんです）（武邑 p. 180）

〈なる形〉

助詞「ニ」を介して「なる」に付く。

- ・取れた麦は牛の餌になるさかいに、ほんまのリサイクルやわいな（取れた麦は牛の餌になるから、本当のリサイクルだよ）（武邑 p. 80）

〈副詞形〉

形容名詞に「ニ」を付ける。

- ・畑から丁寧に取って来て（畑から丁寧に取って来て）（武邑 p. 49）

〈丁寧形〉

「デス」または「ドス」を付けるが「ドス」は高年層でも稀である。「デス」と「ドス」の活用は、過去形「デシタ」「ドシタ」、中止形「デシテ」「ドシテ」、仮定形「デシタラ」「ドシタラ」のように共通するが、推量は「デス」は「デショ（一）」と「デスヤロ（一）」の2形式あるのに対し（後者は主に高年層）、「ドス」は「ドスヤロ（一）」のみである。

- ・ゴイゆーのは、幅の大きい鋤ですわ（ゴイというのは、幅の大きい鋤ですよ）（武邑 p. 63）
- ・産婆さんて、たいしたもんどすなーし（産婆さんって、たいしたものですねえ）（武邑 p. 36）

〈のだ形〉

「ナ」に「ンヤ」を付ける場合と、「ヤ」に「ネン」や「ネ（ヤ）」を付ける場合があるが、「ネ（ヤ）」の使用頻度は低い。動詞や形容詞と異なり、「ノヤ」「ニヤ」は現れない。過去形は「ヤッタンヤ」または「ヤッテン」になる。

- ・けんど、そら講衆て、有難いもんなんやで（けれども、そりゃあ講衆って、有難いものなんだよ）（武邑 p. 93）
- ・ほんでに、ほーゆー役員を選ぶ選挙は、もーほら真剣やってんど（だから、そういう役員を選ぶ選挙は、もうそりゃあ真剣だったんだぞ）（武邑 p. 62）

用例出典

武邑：武邑尚彦（2005）『写真と語り 近江湖東・豊郷の暮らし：昭和10年代に生きた人々』法蔵館

参考文献

- 寛大城（1962）「滋賀県方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 酒井雅史（2014）「滋賀県長浜市方言」方言文法研究会（編）『全国方言文法辞典資料集(2) 活用体系』科研費報告書
- 増井金典（2000）『滋賀県方言語彙・用例辞典』サンライズ出版

（逸民 誠）